

令和3年7月20日

各位

16時00分

外国公館支援協議会

動画「Aichi-Nagoya Development Trajectory（愛知・名古屋発展の軌跡）」 の配信について

外国公館支援協議会（会長：内藤 弘康 名古屋商工会議所 副会頭＜国際委員長＞、構成：愛知県、名古屋市、名古屋港管理組合、名古屋商工会議所）では、コロナ禍により対外活動が難しい状況が続く中でも、在名外国公館の活動を支援し、さらには当地への新規公館誘致につなげていくことを目的に、愛知・名古屋の歴史や文化を学べる動画（使用言語：英語）を用意し、名古屋商工会議所 YOUTUBE サイトにて配信いたしました。

本動画を通じ、在名外国公館の皆様のみならず、世界各国の皆様が当地に興味を持っていただき、コロナ後により多くの海外の方が当地を訪れるきっかけになればと考えておりますので、本事業の報道につきまして、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

＜本動画のポイント＞

- ① 自宅やオフィス等に居ながら愛知・名古屋の歴史・文化について誰でも気軽に学べる！
- ② 愛知・名古屋の成り立ちを古代から現在に至るまで広く簡潔に説明！
- ③ 英語のナレーション・字幕を使用！

＜動画概要＞

1. タイトル 「Aichi-Nagoya Development Trajectory（愛知・名古屋発展の軌跡）」

2. 内 容

愛知・名古屋の歴史や文化を、当地が地理的・経済的要衝であることに触れた上で、古代・熱田神宮の成り立ちや、「清洲越し」等の歴史的イベントを紹介しながら解説

3. 使用言語 英語（ナレーション・字幕）※日本語訳別添

4. 動画時間 12分49秒

5. 掲載 URL https://youtu.be/SKukLB_5W0w

6. 本件担当

外国公館支援協議会事務局（名古屋商工会議所 企画調整部 インフラ・国際ユニット）木本
TEL：052-223-6742 Mail：kimoto@nagoya-cci.or.jp



＜ご参考＞ 外国公館支援協議会とは

1993年4月に前身組織「外国公館支援連絡協議会」が発足し、1996年4月に「外国公館支援協議会」（会長：名商副会頭）として発展的改組。以後、中部地域の国際化を推進するため、在名外国公館の活動を支援するとともに、新たな外国公館の誘致を図ることを目的に、外国公館との交流会/産業・文化視察会、他地域に於ける行政機関と外国公館との連携等についての調査等を実施。

以上

外国公館支援協議会 動画「愛知・名古屋発展の軌跡」（日本語訳）

<会長挨拶>

「愛知・名古屋 発展の軌跡」をご覧いただきありがとうございます。外国公館支援協議会・通称 外公協、会長の内藤でございます。

外公協は、愛知県、名古屋市、名古屋港管理組合、そして名古屋商工会議所の4団体で構成しております。

主な活動としては、在名の外交官の皆様を対象に、地元行政や経済界と、あるいは外交官相互のネットワークを強化していただくとともに、愛知・名古屋の歴史や文化、産業について理解を深めていただくために、交流会や視察会などの各種イベントを実施しております。

この動画は、外交官の皆様にも、現在の愛知・名古屋が成り立つまでの発展の歴史について、気軽に学んでいただくためにご用意いたしました。

在名公館の皆様に限らず、名古屋に公館をお持ちでない外交官の皆様にも、愛知・名古屋に興味を持っていただくきっかけになれば幸いです。それでは、どうぞご覧ください。



<愛知・名古屋とは>

日本列島のほぼ真ん中に位置する、愛知・名古屋。鉄道網、道路網が発達して東京や大阪からの交通の便もよく、日本の三大都市の一つとして成長してきました。県内には中部国際空港、県営名古屋空港の2つの空港があり、国内はもとより世界へのアクセスも快適です。

<日本のモノづくりの中心地>

愛知・名古屋は日本のモノづくりの中心地。特に自動車産業、航空宇宙産業の拠点であり、世界的にも有名な企業が集まっています。また、自動車や航空機、ロケットなどの最先端・高精度なモノづくりを支えるために、工作機械産業が発展しているのも特色です。



これら製造業を中心にさまざまな産業の貨物を扱う名古屋港は、貿易額でも貨物取扱量でも日本一。全国に先駆けてコンテナターミナルの自動化を進めるなど世界に開かれた日本の海の玄関口となっています。

日本の三大経済圏の一角として発展してきた愛知・名古屋では、利便性に富んだ都市機能が充実し、さまざまな業種での雇用も安定しています。

その一方で、職場と住まいが比較的近く、海や山にも気軽に遊びにいけるほど、身近に自然環境が広がっています。そのため転勤者や外国の方も含め、多くの人々がのびやかに暮らしを楽しんでいます。

では、愛知・名古屋の発展のルーツは、どこにあるのでしょうか。

それは遙か古代にまでさかのぼります。

<古代・中世>

名古屋のある濃尾平野は、温暖な気候に恵まれた非常に自然豊かな地域。

北に山々が連なり、そこを源流とする川が農業に適した土壌をつくり、南は海産物の宝庫である伊勢湾に面しています。

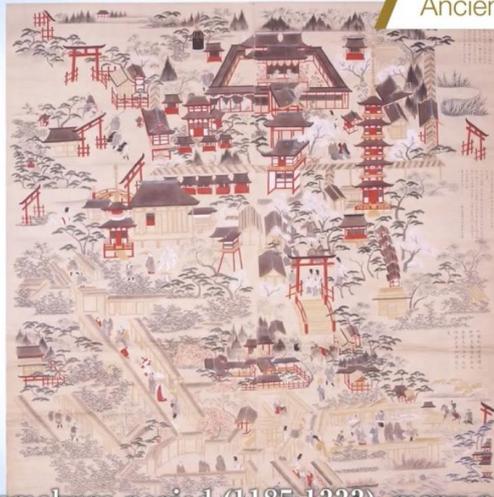
こうした自然条件の利点に加え、日本の真ん中にあることも幸いし、名古屋を中心とする尾張地方には、海や陸からさまざまなものが集まり、古くから発展してきました。

古代、この地域の中心として栄えたのが、熱田神宮を祀る熱田です。

熱田神宮は、歴代の天皇が皇位とともに受け継いできた三つの宝物（鏡・剣・勾玉）の一つ、草薙剣を祀る神社。

その創祀は113年とされ、いにしえより信仰を集め、今なお伝統の神事を継承しています。

鎌倉時代（1185-1333）には、街道を行き来する人や、海から舟でやってくる人と、多くの人々が熱田神宮に参詣しました。門前には多くの店が立ち並び、旅人や商人でにぎわうなど、熱田は経済も発展しました。



During the Kamakura period (1185-1333), many pilgrims visited Atsuta Jingu Shrine via the highways, and by boat via the sea.

<近世>

鎌倉時代は日本の歴史の転換点でもありました。それまで社会を支配していた貴族の力が衰え、武士の時代へと変わったのです。

その後、各地で有力な武士が覇権を争うなか、天下統一を目指したのが、愛知・名古屋ゆかりの武将である織田信長、豊臣秀吉、徳川家康です。彼らはその功績から「三英傑」とたたえられ、今でも日本中の人々に親しまれています。



Oda Nobunaga



Toyotomi Hideyoshi



Tokugawa Iyeyasu

Known as the Three Unifiers for their achievements, they are still admired by people all over Japan.

最終的には家康が天下統一を果たし、1603年に江戸幕府を開きました。

家康は徳川家の経済力を示すため、1615年、名古屋の地に巨大な名古屋城を建築しました。

史上最大の天守閣には、黄金を惜しげもなく使った鯨を載せ、その輝きで人々を圧倒します。

この天守閣、当時のまま忠実に復元された本丸御殿は、日本の最高水準の木造建築技術の集大成。現代となっては貴重な伝統的なものづくりの、総合展示博物館とも言えるでしょう。

家康は名古屋城の築城と同時に、城下のまちづくりに着手します。

それまでの尾張地方の中心地は、信長が経済を発展させる政策を行って栄えた現代の名古屋の隣にある清須でした。

しかし、家康は、名古屋に新しく城下町をつくり、その町に武士や町人など人だけでなく、寺や神社、橋や町の名前までを丸ごと引っ越してきました。これを「清須越し」といいます。



また、経済活動をしやすいように、京都のまち割りに倣って家康は名古屋の城下町に碁盤の目状に区切った「碁盤割」の町をつくり、そこには主に職人と商人が住み、ものづくりや商いが活発に行われるようにしました。

この家康のまちづくりが、今の名古屋のまちの基盤となっています。

家康が開いた名古屋をさらに豊かにしたのが、尾張藩七代藩主の徳川宗春です。

さまざまな規制緩和や産業の奨励を行い、経済発展を目指しました。

地場産業では焼き物、煙草、宮重大根、友禅などで産業を興したので、ものづくり、もの売りのまちになっていきました。

文化面では芝居小屋が次々にできて、通りには商店が軒をつらね、町は人々でにぎわいます。また、千利休を流派の祖とする千家の茶道が流行し、お茶やお花も盛んに習われるようになりました。こうして名古屋は、経済はもちろん文化面でもおおいに繁栄しました。

江戸時代には、今の名古屋に伝わる伝統産業も発達しました。

その一つ、有松・鳴海絞は、1608年に生まれた伝統工芸品。将軍への贈り物となり、全国の大名たちにも愛されてきました。

布を糸でくくり、さまざまな模様を浮かび上がらせる高い技術力は、時代を越えて継承され、現在も着物や手ぬぐいなどさまざまな商品が生み出されています。

また、尾張藩では下級武士の副業が認められ、武士たちは桶や扇子をつくったり、本をするための版木を彫ったりしていました。

木を使った製品が多いのは、尾張藩の領地だった木曾の山から良質な檜が豊富にあったためで、それがモノづくりにつながっていきました。

<近現代>

江戸時代から脈々と続くモノづくり文化は、近代になると愛知・名古屋の産業の礎となり発展していきます。

からくり人形に使われた歯車の作製や歯車とばねを組み合わせて人形を自動で動かす技術は、のちに精密技術へと進化します。また、からくり人形を載せた祭の山車など良質な木材を活用した木工技術も発展し、それらを活用することで鉄道車両、航空機、工作機械の製造へとつながっていきます。



また、愛知は綿織物の産地でもあり、自動織機の発明が、繊維産業の土台を築きました。そのモノづくりのオリジナリティは、今や世界をリードする自動車産業へと受け継がれています。

名古屋近郊のまち、瀬戸では9世紀頃から良質な土が採れたことでやきものが生産され、その技術は現在の陶磁器産業、セラミック技術の発展につながっています。

<未来へ歩み続ける愛知・名古屋>

愛知・名古屋のモノづくりのテクノロジーは、古代から培われた豊かな経済基盤のもと、江戸時代から近代、現代へと受け継がれさらに磨かれてきました。

その進化はとどまることなく、環境問題や宇宙開発などへのチャレンジも始まっています。

山・川・海・野の幸に恵まれ、伝統と進化、都市と自然、産業と暮らしがバランスよく整った、文化豊かなまち、愛知・名古屋。

これからも、より良い未来に向かって歩き続けていきます。